

# 『ノーサンガー寺院』と『ジェイン・エア』 についての研究

堀 出 稔

## A Study of *Northanger Abbey* and *Jane Eyre*

MINORU HORIDE

ジェイン・オースティンが『ノーサンガー寺院』の執筆にとりかかったのは、1797年、彼女の創作活動の前半期であった。1803年には完成されていたのであるが、他の前半期の作品、『高慢と偏見』、『分別と感傷』などと同じく、およそ10年の歳月が流れた後出版されることになった。一方シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』は、1846年から執筆され、翌年出版された。二人の作家は18世紀後半から19世紀半ばにかけて生涯を送ったわけだが、ちょうどその頃のイギリスは産業革命が急激に進行している時期であった。このような時代背景のもとに創作活動を続けた二人であるが、彼女達の現実への接し方、社会についての理解の仕方には、様々な相違点が見い出される。この小論においては、第一にシャーロット・ブロンテが個人的な手紙の中で書いていたジェイン・オースティンの小説についての批評に注目し、その問題点を分析する。第二に『ノーサンガー寺院』と『ジェイン・エア』をテーマに沿って分析し、第三に伝記に見られるオースティンとブロンテの社会への接し方及び考え方を分析する。彼女達のこの二つの作品の中に見い出される視点の相違を考察してみたい。

第一の課題、シャーロット・ブロンテの個人的な手紙に書かれたジェイン・オースティンに関する意見とは、次のような内容である。

Even to the feelings she vouchsafes no more than an occasional graceful<sup>1)</sup> but distant recognition—too frequent converse with them would ruffle the smooth elegance of her progress. Her business is not half so much with human heart as with the human eyes, mouth, hands and feet. What sees keenly, speaks aptly, moves flexibly, it suits her study: but what throbs fast and full, though hidden, what the blood rushes through, what is the unseen seat of life and the sentient target of death—this Miss Austen ignores. She no more, with mind's eye, beholds the heart of her race than each man, with bodily vision, sees the heart in his heaving bosom.

ジェイン・オースティンの作品を評して、シャーロット・ブロンテは次のような点を掲げている。オースティンの作品は繊細で小説構成上においても優れた完成の域に達しているが、人間に対する探求の方法は、ただ社会における人間関係の調整に終始しているということである。その理由として、シャーロットは人間に対する探求に触れ、オースティンの作品には人間の心の底に強く脈打ち流れるもの、生命に対して見えない中心的位置を占めるもの、そして死に対して感覚的に取らえられる目的などを全く無視している、と評する。しかし、シャーロットの批評は全面的に正しいのであろうか。もし正しいとすれば、それ以外の人生の部分を無視する

ことになるのではないだろうか。シャーロットのこのような批評から考えても、オースティンの人間探求の視点の在り方とシャーロットのそれとは全く別なものであることが察せられる。シャーロットの批評は自分の目を通してのみなされたものという他ない。しかし、オースティンにおいてもシャーロットにおいても、人間探求という面には変わらないのである。

『ノーサンガー寺院』において、オースティンは世の中のことをあまり知らない純粋なキャサリン・モーランドの人間関係を通して、二つの事柄を思考しているように思われる。一つは世の中の良識の在り方であり、もう一つは良識を越える何かを暗示することであった。良識の在り方というものを浮き彫りにするためにオースティンは、ゴシック的感傷性のもつ幻影と良識とを対照させて、永続的価値のある良識の在り方を描こうと試みたようだ。それ故にオースティンは、キャサリンをティルニー家とソープ家の人々に向かい合わせる。キャサリンにとってソープ家の人々は、バースでの最初の交際相手であり、疑いをいだかない彼女はソープ家の外面的振舞いに惑わされ、交際を深めてしまう。しかしジョン・ソープに対しては、彼の粗野な態度や言葉使い、自分の意見に常に執着することやブレイズ城への遠出の時に無理にキャサリンを連れて行こうとした非常識な態度から、彼女は彼を全く信頼しなくなっていった。イザベラに対してもやはり段階的に信頼感を失ってゆく。

Catherine thought this reproach equally strange and unkind. Was it the part <sup>2)</sup> of a friend thus to expose her feelings to the notice of others? Isabella appeared to her ungenerous and selfish, regardless of every thing but her own gratification. These painful ideas crossed her mind, though she said nothing.

すなわち、ブレイズ城への遠出にキャサリンを兄同様強引きに連れていこうとしたこと、ジェイムズと交際していたイザベルがフレデリック・ティルニーと仲よくなり始めたこと、さらにノーサンガー寺院に泊っているキャサリンに対してわがままな手紙を送ってきたことがその原因と言える。これらのことによってキャサリンはソープ家の利己的な態度を知るようになる。さらにイザベラに教えられたゴシック小説の影響は、ノーサンガー寺院において故ティルニー夫人への迷想にまで及ぶのである。しかしヘンリー・ティルニーによって戒められ、ついにゴシック的感傷性の持つ迷想から目覚めることになる。このように、キャサリンはソープ家の人々の常識のなさに触れることによって、まず常識とはどうあるべきかを考えたようである。そしてティルニー家と交際することによって、彼女は良識の領域に至るのである。ティルニー家の愛情深い親切さに心うたれ、ノーサンガー寺院での滞在はキャサリンにとって喜びに満ちたものであった。しかし、ティルニー将軍の慇懃さは常にキャサリンに不審の念をいだかせた。さらに急に彼の意向によって、キャサリンはノーサンガー寺院を追われるように去って行かねばならなくなった。故郷に帰ったキャサリンはこの理解しがたい行為に対して心悩ます。

As they walked home again, Mrs. Morland endeavoured to impress on her <sup>3)</sup> daughter's mind the happiness of having such steady well-wishers as Mr. and Mrs. Allen, and the very little consideration which the neglect or unkindness of slight acquaintance like the Tilneys ought to have with her, while she could preserve the good opinion and affection of her earliest friends. There was a great deal of good sense in all this; but there are some situations of the human mind in which good sense has very little power; and Catherine's feelings contradicted almost every position her mother advanced.

母の意見はもっともなことであったが、良識でさえ力が及ばない人間の心の在り方があるこ

とに気がつく。すなわち、ここで初めて良識によってさえノーサンガー寺院を追い出されるような事件に対して、判断を下すことができないことを知る。最初何も世の中の事を知らないキャサリンではあったけれど、バスとノーサンガー寺院での経験によって、良識というものと良識では判断できない何か、すなわち、人間の自我の深部にまで触れることができたように思える。オースティンはこの作品の述べようとすることを読者に委ねる形をとっているが、社会における人間の自我の問題を、人間関係における良識を基盤にしてどうあるべきかを探求しているのではないだろうか。

次にシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』を分析し、彼女の作品に表現された社会についての理解の仕方、現実への接し方を考えてみる。シャーロットはオースティンを痛烈に批評したのであるが、シャーロットの視点はオースティンのそれと全く異なっているように思われる。彼女は絶えず視点を自分そのものに向けているようだ。それ故、オースティンの作品に見られる人間関係における笑いや風刺を理解できないようである。ジェイン・エアがロチェスタと結婚に至るまではまさに試練であり、よりよき人生に向かう苦しみそのものに受けとれる。例えば、『ジェイン・エア』の最初に登場するゲーツヘッドのリード家は、ジェインにとって牢獄にも等しい場所であった。

What a consternation of soul was mine that dreary afternoon! How all my<sup>4)</sup> brain was in tumult, and all my heart in insurrection! Yet in what darkness, what dense ignorance, was the mental battle fought! I could not answer the ceaseless inward question—why I thus suffered; now, at the distance of—I will not say how many years, I see it clearly.

過酷な仕打ちによってジェインは絶望し、リード家に反抗しようとする。ゲーツヘッドでの日々は、ジェインに対する虐待と荒涼とした描写が示すように、どうにもならない救い難い状態なのである。ジェインにとって救いとなる状態は、ただ反抗することなのである。彼女がリード夫人に向かって激しく問いかける場面では、その荒涼とした風景描写に明るさが増し、光り輝く風景が背景となるのである。ローウッドでの学校生活もゲーツヘッドでの生活と異なるところはなく、厳しく苦痛なものであった。ただ彼女にとって唯一の光のような存在となるヘレン・バーンズが彼女の前に現われる。以前リード家で示した苦難に立ち向かう力強さは、ヘレン・バーンズとの友好によってさらに確かなものになり、人間としての成長に役立ってゆく。しかしリード家での苦しみとは異なった苦難に再び耐えてゆく姿が、そこにある。

“You are sure, then, Helen, that there is such a place as heaven; and<sup>5)</sup> that our souls can get to it when we die?”

“I am sure there is a future state; I believe God is good; I can resign my immortal part to him without any misgiving. God is my father; God is my friends: I love him; I believe he loves me.”

重い病いのため死にそうになっているヘレンだが、神を信じ、明るく力強くこの世の苦しみを乗り切っていくとしようとする彼女の姿に、ジェインは励まされる。ローヘッドは苦難の場所にちがいがなかったが、ヘレンという啓示の光を与えてくれる友人にめぐり会うことによって、ジェインにとっと発展の場所となった。さらにソーンフィールドは、ジェインの内面的な世界を高揚させてくれる場所となる。ロチェスタとの結婚までには、さらに多くの苦難が続く。ロチェスタの非社会的な態度、彼の狂った妻の存在、そしてその妻の失火と彼女の死というように多くの外的危機は続く。だがジェインは様々な苦しみを乗り越え、最後にはロチェスタと結婚す

ることになる。このようなジェイン・エアの人生の過程をM・キンケッドーウィークスは、次のように述べている。

We begin to see why Jane Eyre should be so concerned to break through the public and social, in order to free the personal self-hood of the heroine and probe the hidden forces in the heart itself which make for its life or death. While Emma's progress is through false situations and misreadings of social and moral value to the discovery of a true relationship, Jane's is a pilgrim's progress from depth to depth in her own heart to reveal the nature of her ultimate self, before it can be fulfilled in love. Both novels end in marriage, but love for Emma is an adjustment between "Hartfield" and "Don(e) well," whereas the last house of Jane's heart is a very private place.

シャーロットは『ジェイン・エア』において、社会における個人の自我を因襲という束縛から解放し、個人の秘められた力を探し出していくため努力している人間の姿を描くことに関心があるのではないかというのである。

さて、伝記に見られるオースティンとシャーロットの社会への接し方及び考え方はどうであっただろうか。オースティンの伝記の中で注目すべき点を掲げてみると、彼女の生活態度は目立たない控えめな態度であり、日常の家庭の仕事に専念し、同時代の作家達との交流などもあまりなかったと言われる。

How, when and where she wrote these books we shall never know. Nothing is to be learnt from the letters, and the accounts given by her family are unconvincing. They say she wrote sitting in the parlour amid all the family comings and goings;

このように彼女は自分の部屋ではなく、家庭共通の居間で人が来ればすぐ隠せるほどの小さな紙に作品を書いていたという逸話から判断しても、彼女が家庭生活に重きをおき、最初から作家としての意識をもって創作活動に臨んだわけではないことがうかがわれる。彼女はフランス革命時代に成長し、彼女の周辺にも革命の影響が現われていたにもかかわらず、彼女の作品の中にあまりそのような描写がないということである。このような彼女の創作における視点は、周囲の限られた人間に向けられているようだ。すなわち、彼女の周辺にいる人々の人間関係の織りなす心の綾を豊かな感性で描き出すことであり、冒険的なロマンスや外部的動向に視点を向けないのである。この限られた人間関係を彼女が小説の素材に向けるのは、むしろ芸術家としての立場から意識的になされているのではないだろうか。彼女の鋭い感覚は限られた人々を描く時、その個々の登場人物は生き生きと描かれ、水も漏らさぬ小説構成ぶりは後生の人々に多大の影響を及ぼすものとなったのである。彼女は小説の中で教訓めいた人生哲学を振りかざすわけではなく、あくまでも小説の流れと人々の性格描写をおこなっていく。しかし、その登場人物の性格描写は繊細さのみに終るのではなく、人間の生きる最善の道を暗示しようとする。そして彼女の自我の喜怒哀楽や内的葛藤を描くわけではなく、彼女の視点は人々の人間関係を通じて社会の在り方に向けられる。社会の一員としての彼女は客観的立場から人間関係をみつめる。そこで当然、社会の良識というものが第一に問題になる。この良識を持たない登場人物の言葉あるいは行動に対して、彼女は痛烈な諷刺で報いる。彼女はただ良識という社会の軌範だけを取り扱ったのではない。社会の一員としてその軌範に照らすという態度を維持しながらも、それ以上の事、すなわち、より良い社会の在り方を問い続けていたようである。オーステ

インの自我を抑制した客観的な態度は18世紀の風潮の影響もあろうが、彼女の育った環境に負うているところが大きいのではないだろうか。牧師の娘としての立場と良識を基盤としてさらに向上的な精神を求めようとする態度は、環境の所産と思われる。

一方シャーロットの伝記において注目すべき点はどうか。ヨークシャのホワースという村の牧師の子供として生まれ、生涯をほとんどそこで過ごすことになった。エミリー・ブロンテ、アン・ブロンテと共にブロンテ姉妹としてヴィクトリア朝時代の女流作家の一人である。シャーロットは幼い頃からエミリーとアンと弟のブランウェルと共に空想物語に夢中になった。エミリーとアンが組になって『ゴンドル物語』を創作し、シャーロットとブランウェルが『アングリヤ物語』を創作した。二つの空想物語は英雄が登場し、戦いと恋愛が語られるロマンティズムに満ちたものであった。当時のイギリスの大きな出来事の一つはワーテルローの戦いで、ウェリントン公爵の勝利であった。さっそくウェリントン公は『アングリヤ物語』に登場するほどシャーロットはウェリントン公を崇拝していたと言われる。また幼年時代において注目すべき点は、父の影響である。

Their father was in the habit of relating to them any public news in <sup>8)</sup> which he felt an interest ;

父パトリック・ブロンテは子供達に新聞の中で興味のある記事を読んで聞かせたという。特にシャーロットは政治に強い関心を示した。学校生活を送るようになる15歳頃の彼女は、教室でカートライトに対するラダイトの暴動の話聞き強い影響をうけた。彼女は後に『シャーリ』という作品を書くが、ラダイトの乱の生じたローホウルドとその周辺を物語の舞台として選んでいると言われる。学校時代もう一つの事実は、学友であるメアリー・ティラーの見たシャーロットの姿である。

Her idea of self-improvement ruled her even at school. <sup>9)</sup>

このようにシャーロットは常に学ぶことによって自分を向上させようと努力したようである。彼女の関心は文学ばかりでなく絵画、音楽にまで及んだ。彼女が自分の能力を鍛え、広い世界を限りなく求めようとする精神は、後の彼女の作品に強く反映しているようである。

今までジェイン・オースティンの『ノーサンガー寺院』とシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』について、二人の作家の創作における視点をめぐって三つの課題について分析してきたのであるが、その結果を考えてみる。オースティンは社会における人間関係を客観的に把握し、良識を基盤にした社会の在り方を考えた。しかし、オースティンは『ノーサンガー寺院』の主人公キャサリン・モーランドを通して描いたように、社会には良識によってさえ判断できないほどの人間の自我の問題があると考え、それを読者に問うているように思われる。一方シャーロットは、社会における人間関係から人間の自我の問題を問うのではなく、『ジェイン・エア』において描いたように、一人の人間がいかなる困難にも耐え、より良き人生を全うするという問題に関心があるように思われる。

#### Texts

- 1) Austen, Jane: *Northanger Abbey & Persuasion*, Dent, (1966)
- 2) Brontë, Charlotte: *Jane Eyre*, Dent, (1963)

#### Reference Books

- 1) Kennedy, Margarent: *Jane Austen*, Arthur Barker, (1966)

- 2) Gaskell, E.C.: *The Life of Charlotte Brontë*, Smith, Elder & Co., (1900)
- 3) Gregor, Ian: *The Brontës*, Prentice-Hall, Inc., (1970)

#### Notes

- 1) *Jane Austen*, p.97
- 2) *Northanger Abbey & Persuasion*, p.78
- 3) *Ibid.*, p.199
- 4) *Jane Eyre*, p.9
- 5) *Ibid.*, p.76
- 6) *The Brontë*, p.77
- 7) *Jane Austen*, p.28
- 8) *The Life of Charlotte Brontë*, p.81
- 9) *Ibid.*, p.105